九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

高齢者のスポーツに関する社会心理学的研究(3)：ゲートボール実施をめぐる問題について

金崎，良三
Institute of Health Science Kyushu University

徳永，幹雄
Institute of Health Science Kyushu University

多々納，秀雄
Institute of Health Science Kyushu University

https://doi.org/10.15017/487

出版情報：健康科学. 9, pp.205-215, 1987-03-28. Institute of Health Science,Kyushu University
バージョン：
権利関係：

J. Health Sci., 9: 205−214, 1987.

研究資料

高齢者のスポーツに関する社会心理学的研究 (3)
——ゲートボール実施をめぐる問題について——

金崎良三　徳永幹雄　多々納秀雄

A Social Psychological Study on Sport among Senior Citizens (3): The Problems on Playing Gateball

Ryozo KANEZAKI, Mikio TOKUNAGA and Hideo TATANO

緒　言

これまで金崎・徳永は，高齢者のスポーツとしてのゲートボールに注目し，社会心理学的視点から研究に取り組んできた。その第1報[5]においては，ゲートボールの実施状況や実施者の健康・体力，態度，信念，行動意図，ゲートボールの効果などについて，また第2報[6]においては，ゲートボールの実施・非実施を規定する要因や要因間の関連構造について明らかにしてきた。近年，ゲートボールの普及・発展に伴ってこの種の調査研究[1)2)]も報告されるようになり，その情報も増加する傾向にある。しかし反面，ゲートボール熱の高まりや行きすぎによるトラブルや問題も指摘されるようになった。こうしたなか金崎[7]は，ゲートボールをめぐる問題として，各種調査資料や雑誌，新聞記事等による情報を手がかりに，次の6つの点を指敵した。それらは，①ゲートボールの団体・組織とルール統一の問題，②競技志向の問題，③家庭や地域での役割の問題，④ゲートボール集団の閉鎖性の問題，⑤練習場所の問題，⑥エチケット・マナーの問題，である。もちろん，これらの問題がどの程度現実化しているかについては仮説の域を出るものではなく，検証されてはいない。

従来のゲートボールに関する調査は，その実態や効果など，どちらかといえばプラス面に重点を置いたものが多かった。そこで今回は，ゲートボールのマイナス面すなわち実施上の問題に焦点を当てて調査を実施した。本研究においては，金崎の提起した仮説①「ゲートボールの統括団体の乱立やルールの違いによる混乱がある」，仮説②「ゲートボールの実施方法が勝敗を重視するようになり，競技志向化してきた」，仮説③「家庭での役割遂行をめぐって問題がある」に関して，これを検証するとともにゲートボールを実施するうえで不平や不満がどの程度あり，そしてその内容はいかなるものなのかについて明らかにしようとした。

方　法

1. 調査の概要

1）対象

福岡市（都市）と八代市（農村）における50歳以上の男女ゲートボール実施者と非実施者に対して「ゲートボールについての調査」を，またゲートボール実施者のいる家族に対して「ゲートボール実施者の家庭への調査」を実施した。前者の調査について，本稿ではゲートボール実施者のみのデータを用いるが，ここで実施者の特性を簡単に述べておこう。対象者の性別は，男子61.5%，女子37.7%であり，年代は50代が男子11.7%，女子12.6%，60代男子40.2%，女子44.7%，70代以上男子46.4%，女子38.6%であった。性別では男子が多く，年代別では50代が少ない。また，ゲートボールの経験年数は4年以下が男子39.9%，女子40.0%，5～6年が男子24.5%，女子22.8%，7年以上が男子29.6%，女子33.0%，監督経験者は男子62.1%，女子35.3%，審判有資格者は男子57.3%，女子29.3%であった。男女ともに半数以上が5年以上の経験者であり，男子の場合は監督経験者や審判有資格者も多い。

Institute of Health Science, Kyushu University 11. Kasuga 816, Japan.

2）時期

昭和58年7月～8月。

3）方法

各地域のゲートボール協会役員，地区世話人，クラブの代表者等を通じて調査票の配布と回収を行った。

4）調査票の配布と回収

表1～2に示すとおりである。「ゲートボールについての調査」は90.6%，「実施者の家庭への調査」は81.4%と非常に高い回収率であった。

5）調査内容

「ゲートボールについての調査」では，ルールの違いによる困ったことの経験，ルール統一への意見，ゲートボール団体・組織のあり方，大会のあり方，練習や対人関係での不満，選手の選出で嫌になった経験，審判やクラブ，指導者・監督に対する不満，ゲートボルをやめたいと思ったこと，ゲートボール継続の条件などについて，また「ゲートボール実施者の家庭への調査」では，家族の協力，仕事とゲートボールについての評価，実施者の生活についての評価，困ったことの経験，ゲートボール実施上の問題などを調べた。なお実際は，以上の他かなり多くの点について調査したが，ここではそれらの結果については触れないため割愛した。

表1　調査票の配布と回収(その1)

地　域	配布数	回収数	回収率
福岡市	285	240	84.2
八代市	300	290	96.7
計	585	530	90.6

(「ゲートボールについての調査」)

表2　調査票の配布と回収(その2)

地　域	配布数	回収数	回収率(%)
福岡市	250	200	80.0
八代市	250	207	82.8
計	500	407	81.4

(「ゲートボール実施者の家庭への調査」)

2. 分析方法

データは，男女別に基礎集計を行い，さらに調査結果をいくつかの角度から把握するため，次のようなクロス分析を行った。

1）年代別…50代，60代，70代以上。

2）地域別…都市部，農村部。

3）ゲートボール経験年数別…4年以下，7年以上。

4）監督経験別…有，無。

5）審判資格別…有，無。

結果と考察

1. 基礎集計による結果

1）ルールについて

まず，ルールが違うことで困った経験が「ある」という者は，全体で32.5%であった。性別では，男子は37.5%，女子は24.8%であり，男子の方に困った経験をもつ者が多い (P<.001)。従来，ゲートボールを統括する団体がいくつかあり，それぞれが異なるルールや体制でその普及に努めてきたため，特にルールの違いによる混乱が少なからず指摘されてきたが，今回の調査でもかなりの者が困った経験をしており，仮説①はある程度検証されたといえよう。

そこで表3は，ルールの統一についての意見を調べたものである。それによると，「全国統一ルールにすべきである」という意見が大勢を占めていることがわかる。地方のルールを認めようとするものは，1割にしかすぎない。この点も性差が顕著であり，男子の方が全国統一ルールを望む者が多い。

2）団体・組織のあり方

ゲートボールの団体・組織のあり方については，「全国組織として1つにまとまった方がよい」61.5%（男子72.6%，女子43.6%），「いくつかの団体・組織があ

表3　ルール統一について　(%)

区分		N	全国統一ルールにすべきである	地方には地方のルールがあってよい	わからない	その他	DK
全体		530	78.3	10.0	8.3	0.4	3.0
性別	男子	325	85.8	6.8	4.3	0.3	2.8
	女子	202	65.8	15.3	14.9	0.5	3.5

性差p<.001

ってよい」27.0%（男子20.3%，女子37.6%），「わからない」9.2%（男子4.9%，女子16.3%）という結果であった。先にみたルール統一に対する意見と同様，全国組織としてまとまった方がよいとする意見が多い。但し，この傾向は男子に強く，女子は柔軟な意見をもつ者がかなりみられる。

この点について付記すると，全国的には昭和59年12月に日本ゲートボール連合という統一組織が発足している。その後，各県でも組織統一の動きが進み，現在では47都道府県が下部組織として日本ゲートボール連合に加盟しており，ルールの違いによるかつてのような混乱は避けられることになった。

3）大会のあり方

大会のあり方に対する意見は，表4によると全体的には全国大会を望む者が最も多い。この傾向は男子に強い。しかしながら，その他の意見も少しずつみられる。特に女子は，「対抗試合・親善試合程度でよい」や「市町村大会くらいでよい」とする者が上位を占めており，男子とは著しい差がみられる。いずれにせよ，大会のあり方についての意見は多様であるといってよかろう。

近年，ゲートボールの競技会が増え，その規模も巨大化してきたことと相俟って，試合での勝敗を重視する傾向が強くなってきたことの指摘がある。本稿でいう仮説②も，この点を取り上げてゲートボールの実施方法が競技志向化してきたのではないかというものであった。確かに全体的にみれば，全国大会を望む者が多いし，またある程度勝敗主義の傾向もみられるるものの，大会のあり方についての意見を通してこの点を判断すると，実施者の間では競技志向の傾向がそれほど強いということではない。したがって，今回の場合仮説②は検証されたとはいい難い。

4）練習に対する不満

日頃の練習の仕方に対する不満の程度は，「非常によくある」3.2%（男子4.3%，女子1.5%），「少しある」23.4%（男子23.7%，女子22.8%），「ほとんどない」68.1%（男子66.5%，女子70.8%）であった。大部分の者は，練習に対して不平・不満をもっていない。しかし，「非常によくある」と「少しある」という者を合計すると，全体で26.6%となり，いくぶん不満な者もいる。この点は，男女とも同じ傾向をしており，そこに有意差はみられなかった。

表5は，練習に対して不満があるという者にその内容を自由に記述してもらい，それを整理したものである。それによると，「他人を批判する」や「ルールを守らない」，「勝負にこだわりすぎる」，「チームワークに欠ける」などが目立っている。全体として，度数は少ないものの不満の内容としてはさまざまである。また注目されるのは，例えば「指導の仕方が悪い」と「監督の指示に従わない」といったように，メンバーと監督の立場の違いを反映した内容がみられることである。

岩崎たち[3]は，ゲートボールの活動に対する不満について報告したが，その理由は男子が第1位「施設・用具の不備」，第2位「人間関係がうまくいかない」，第3位「技術的に困難」，女子は第1位「もっと時間がほしい」，第2位「技術的に困難」，第3位「健康上」となっており，今回の場合とかなり異なっている。これは，対象者が岩崎らの調査ではクラブや同好会に所属していない者もかなり含まれているが，今回の場合は9割以上がクラブ所属者であることから，ゲートボール実施の形態に違いがあるということ，さらに数量的調査と自由記述という調査方法の違いからきていると思われる。

5）練習中の対人関係

ここでは，練習中の対人関係において嫌になったことの経験について調査した。結果は，「非常によくある」2.3%（男子2.5%，女子2.0%），「ときどきある」37.0%（男子35.7%，女子39.6%），「ほとんどない」54.7%（男子54.8%，女子54.0%）だあった。約4割近くの者が，嫌になった経験があると答えている。この点，男女ともほぼ同じ傾向をしており，性差はまったくない。

表4　大会のあり方　(%)

区分＼カテゴリー		N	全国大会があった方がよい	九州大会でよくらい	県大会でよくらい	市町村大会でよくらい	対抗試合親善試合程度でよい	D K
全体		530	33.4	9.4	13.8	14.3	17.7	11.3
性別	男子	325	42.8	11.4	12.3	10.8	13.2	9.5
	女子	202	17.8	6.4	16.3	20.3	24.8	14.4

表6は，対人関係で嫌になった経験の内容を示す。男女とも最も多いのは，「悪口・かげ口・小言をいう」という項目である。その他，「ミスプレーを責める」，「自己主張しすぎる」，「勝手な行動（プレー）をする」，「勝負にこだわりすぎる」などが主に指摘されている。これらは，練習に対する不満の内容とかなり重複しており，逆にいえばゲートボールを実施するにあたっての対人関係の重要性を示すものといえよう。

6）選手の選出について

大会や試合に出場する選手を決めるうえで嫌になった経験については，「非常によくある」2.3%（男子2.8%，女子1.5%），「ときどきある」23.6%（男子24.3%，女子22.8%），「ほとんどない」67.9%（男子67.1%，女子68.8%）であった。男女とも，2割強の者が嫌になった経験があると答えている。表7はその内容であるが，「正選手と補欠を決めるとき」や「チーム編成に対する批判・非協力」など，監督経験者からの指摘が多い。また，監督や指導者的立場から出された内容とメンバーの立場からのそれがみられるが，これは選手を選出する側を選出される側の立場の違いによるものである。

7）審判に対する不満

次に，試合での審判に対する不満についてみてみよう。審判に対して不平・不満を感じることが「非常によくある」という者は0.9%（男子1.5%，女子0%），「ときどきある」は29.4%（男子34.2%，女子22.3%），「ほとんどない」は64.5%（男子59.7%，女子71.8%）であった。審判への不満をよく感じるという者はほとんどいないが，それでも3割近くの者がときどき感じると答えている。この点は，男子の方に不満を感じる者が多く，男女間には5%水準の有意差がみられた。その不満の内容は，表8に示すとおりである。誤った判定や審判技術に対する不満が主なものとなっている。

8）クラブやリーダー（指導者・監督）に対する不満

この点についての結果は，「非常によくある」0.8%

表5　練習に対する不満の内容　　（　）%

内　容	男　子	女　子
1．他人を批判する(悪口，失敗への批判)	11 (12.1)	4 (8.2)
2．ルールを守らない	8 (8.8)	1 (2.0)
3．勝負にこだわりすぎる	6 (6.6)	1 (2.0)
4．チームワークに欠ける(自己中心)	6 (6.6)	6 (12.2)
5．練習が試合中心である	5 (5.5)	—
6．練習が十分できない(場所，時間)	3 (3.3)	3 (6.1)
7．マナーが悪い	3 (3.3)	—
8．真剣さがたりない	3 (3.3)	1 (2.0)
9．ルールが難しい・不統一	3 (3.3)	—
10．指導の仕方が悪い	2 (2.2)	1 (2.0)
11．指導者以外の者が指導する	2 (2.2)	—
12．監督の指示に従わない	2 (2.2)	—
13．技術がうまくいかない	2 (2.2)	2 (4.1)
14．参加者が少なく連携プレーができない	1 (1.1)	—
15．集合時間がまちまちである	1 (1.1)	—
16．実践的練習をしない	1 (1.1)	—
17．新しい会員が少ない	1 (1.1)	—
18．下手な者同士では練習にならない	—	1 (2.0)
19．若い者の意見を聞いてくれない	—	1 (2.0)
20．朝が早すぎる	—	1 (2.0)

自由記述　男子N＝91，女子N＝49

（男子1.2%，女子0%），「ときどきある」19.8%（男子18.8%，女子21.8%），「ほとんどない」73.0%（男子72.9%，女子72.8%）であった。クラブやリーダーに対する不満は，練習や対人関係，選手の選出に対する不満に比べると，これを感じる者の割合は低い。表9は，その不満の内容を示すが，「失敗を責める」，「態度が横柄・利己的」，「言葉使いがよくない」，「意見が合わない」など，サンプル数は少ないもののメンバー

表6　練習中の対人関係で嫌になった経験の内容　（　）%

内　容	男　子	女　子
1．悪口・かげ口・小言をいう（うるさい）	22 (17.7)	13 (15.5)
2．ミスプレーを責める	18 (14.5)	8 (9.5)
3．自己主張しすぎる（わがまま）	10 (8.1)	2 (2.4)
4．勝手な行動（プレー）をする	8 (6.5)	4 (4.8)
5．勝負にこだわりすぎる	7 (5.6)	4 (4.8)
6．人（指導者）の意見（指示）を聞かない	4 (3.2)	—
7．言葉使いが悪い	4 (3.2)	1 (1.2)
8．ルールを守らない	4 (3.2)	2 (2.4)
9．マナーが悪い	3 (2.4)	1 (1.2)
10．未熟者（技術・ルール）と練習すること	3 (2.4)	—
11．自分の意見が聞いてもらえない	2 (1.6)	2 (2.4)
12．指示どおりにプレーできない	2 (1.6)	—
13．上手・下手の区別をする	1 (0.8)	—
14．ゲームに集中していない	1 (0.8)	1 (1.2)
15．作戦上の問題	1 (0.8)	—
16．対抗意識が強い	—	1 (1.2)

自由記述　男子N＝124，女子N＝84

表7　選手を決めるうえで嫌になった経験の内容　（　）%

内　容	男　子	女　子
1．正選手と補欠を決めるとき（監督）	19 (21.6)	3 (6.1)
2．チーム編成に対する批判・非協力	11 (12.5)	4 (8.2)
3．同じ者がいつも試合に出る	4 (4.5)	3 (6.1)
4．試合に出たがる者がいる	4 (4.5)	—
5．出場予定者が出場できなくなったとき	4 (4.5)	—
6．一部の幹部だけで選手を決めている	2 (2.3)	1 (2.0)
7．全員が出場できないとき	2 (2.3)	—
8．勝ちたいときは上手な者を集めるべきだ	1 (1.1)	—
9．上手・下手にこだわりすぎる	1 (1.1)	—
10．調子の悪い人を出さなければならないとき	1 (1.1)	—
11．無理に選手に選ばれたとき	1 (1.1)	—
12．気が合わない者とチームを組むとき	—	3 (6.1)
13．未熟な者（技術・ルール）と組むとき	—	2 (4.1)
14．メンバーがそろわないとき	—	1 (2.0)

自由記述　男子N＝88，女子N＝49

の不満が具体的に質的データとして理解できよう。

9）ゲートボールをやめたいと思ったこと

これまでに，ゲートボールをやめたいと思ったことがあるかどうかについては，「しばしばある」1.7%（男子1.2%，女子2.5%），「ときどきある」7.0%（男子7.4%，女子6.4%），「あまりない」34.9%（男子32.9%，女子38.1%），「まったくない」50.4%（男子53.2%，女子46.0%）という結果が得られた。やめたいと思ったことのある者は，非常に少ない。そこで，「しばしばある」と「ときどきある」に答えた者（男子28人，女子18人）に対してその理由を記入してもらったところ，「批判・批難された・干渉されすぎ」，「他人との不和・いさかい」，「幹部・選手間の対立」，「技術が上達しない」，「指導者についていけない」といったことが主なものであった。やはり，対人関係に関係した内容がウエイトを占めていることがわかる。

10）ゲートボール継続のための条件

表10は，ゲートボールを長く継続していくために大切なことについて記入してもらったものである。今までみてきた問題からも明らかであったが，ここでも「仲間との調和・親睦をはかる」といった対人関係に関することが上位にあげられている。かつて徳永・金崎[8]は，高齢者がスポーツを実施する場合の条件の1つとして，友達づくりや仲間意識の高揚，人間関係の向上など社会的欲求が充足されることを指摘したが，今回の調査によりゲートボールの実施者もこの点を非常に重視していることがわかった。以上の点に，「健康であること」を加えると，ゲートボールを継続していくための主要な条件が浮かびあがる。すなわち，健康と調和である。表10に示されるその他の条件は，形式的なものを別とすれば健康と調和といった条件に付随するものとみられる。

2.　クロス分析による結果

以上は，男女別に基礎集計したものであり，これによって結果の概要は把握できたが，次にこれをもう少し構造的に把握するために行ったクロス分析の結果に

表8　試合での審判に対する不満の内容　(%)

内　　要	男　子	女　子
1.誤った判定をされたとき	26 (22.4)	5 (11.1)
2.審判技術が未熟(声・動作・判定があいまい)	21 (18.1)	10 (22.2)
3.不勉強である(ルールをよく知らない)	13 (11.2)	——
4.ひいき目で審判する	11 (9.5)	4 (8.9)
5.態度が悪い(きびしい・やかましい・私語)	9 (7.8)	5 (11.1)

自由記述　男子N＝116、女子N＝45

表9　クラブやリーダー(指導者・監督)に対する不満の内容　( )%

内　　容	男　子	女　子
1．失敗を責める	9 (13.8)	1 (2.3)
2．態度が横柄・利己的	7 (10.8)	1 (2.3)
3．言葉使いがよくない	4 (6.2)	2 (4.5)
4．意見が合わない	3 (4.6)	1 (2.3)
5．メンバーが指示に従わない(監督)	3 (4.6)	—
6．指導の仕方がきびしい	2 (3.1)	4 (9.1)
7．指導力が疑わしい	2 (3.1)	2 (4.5)
8．同じ者ばかり試合に出す	1 (1.5)	—
9．責任感がない	1 (1.5)	—
10．ルールを正しく知らない	1 (1.5)	—
11．作戦はもっときびしく指導すべきだ	—	1 (2.3)
12．みんなに公平でない	—	1 (2.3)

自由記述　男子N＝65，女子N＝44

ついてみてみよう。表11は，ゲートボールをめぐる問題を項目として設定し，男女別の各種クロス区分による分析とカイ自乗検定の結果を示す。以下，クロス区分別にみていくことにする。

1）年代別

男子は，すべての項目について年代別による差はみられなかった。女子も，年代が高くなるにつれてゲートボールをやめたいと思ったことのある者が少ないという点以外は，有意差はなかった。

2）地域別

男子は，「団体・組織のあり方」と「大会のあり方」に5％水準の有意差がみられ，農村部の方が都市部より，「全国租織として1つにまとまった方がよい」や「全国大会があった方がよい」という者が多い。女子は，「大会のあり方」にのみ差がみられ，農村部は市町村大会や全国大会を望む者が多いのに対し，都市部は対抗試合ないし親善試合を望む者が多い。

3）経験年数別

男子は，ゲートボールの経験年数が長い者ほどルールの違いで困ったことの経験があり，全国統一のルールや団体・組織，全国大会があった方がよいと考える者が多い。つまり，経験者ほど，ルールや体制の一本化を望んでいるといってよい。女子は，「ルールの違いで困った経験」と「大会のあり方」の2項目のみ差がみられた。前者は男子と同じ傾向であったが，「大会のあり方」については男子ほど競技志向的ではない。

4）監督経験別

まず男子は多くの項目に差がみられ，監督経験者ほどルールの違いで困った経験をもち，全国統一のルールや団体・組織，全国大会があった方がよいとする者が多い。また，対人関係や選手の選出の際に嫌になった経験をした者や審判に対する不満を感じる者が多い。しかしながら，ゲートボールをやめたいと思ったことのある者は少ないという傾向がみられる。一方女子は，「ルール統一について」，「団体・組織のあり方」，「大会のあり方」，「選手の選出で嫌になった経験」，「審判に対する不満」の各項目に0.1～5％水準の有意差がみられたが，それら各々の項目についての結果は男子の場合と同様の傾向であった。

5）審判資格別

男女とも，審判員の資格をもっている者はそうでない者に比べて，全国統一のルールや団体・組織，全国

表10　ゲートボール継続のための条件(大切なこと)　(　)％

内　　容	男　子	女　子
1．仲間との調和・親睦をはかる	145 (66.2)	71 (59.7)
2．健康であること	124 (56.7)	74 (62.2)
3．勝負にこだわらない・プレーを楽しむ	34 (15.5)	16 (13.4)
4．無理をしないこと	16 (7.3)	3 (2.5)
5．家庭(族)との調和	12 (5.5)	9 (7.6)
6．仲間づくり	9 (4.1)	5 (4.2)
7．マナーを大切にする	9 (4.1)	—
8．練習場所の確保	7 (3.2)	1 (0.8)
9．ルールを守る	6 (2.7)	4 (3.4)
10．技術が上達すること	5 (2.3)	3 (2.5)
11．ルールの統一	3 (1.4)	—
12．大会への目標，ファイトをもつ	3 (1.4)	—
13．忍耐強くなる	3 (1.4)	1 (0.8)
14．組織の統一，強化	2 (0.9)	—
15．地域住民との親睦	2 (0.9)	—
16．練習場所周辺の美化	2 (0.9)	—
17．公共機関の援助	1 (0.5)	—

自由記述　男子N＝219，女子N＝119

大会があった方がよいと考える者が多い。また女子の場合，審判有資格者は対人関係や選手の選出で嫌になった経験をした者や他の審判に対して不満を感じる者が多くみられる。

以上，クロス分析の結果をみてきたが，ルールの違いで困ったことの経験やルール統一，団体組織のあり方，大会のあり方などゲートボールのルールや組織，体制については，概して経験年数別，監督経験別，審判資格別に差がみられ，経験年数の長い者，監督経験者，審判有資格者の方が，ルールの違いによって困った経験をもち，全国統一のルールや団体・組織，そして全国大会があった方がよいとする者が多く，どちらかといえば競技志向的であるといえよう。なお，練習に対する不満とクラブ・リーダーへの不満は，いずれもクロス区分においても有意差はみられなかった。

3. ゲートボール実施者の家庭への調査結果

1）家族の協力・援助

図1は，ゲートボール実施者のいる家族に対して，どのように協力・援助しているかについてみたものである。それによると，「できるだけ実施者に負担をかけないようにしている」という家族が最も多く，次に「家族全員で協力し，気を使っている」が続いており，この両者で78.6%と大部分を占めている。つまり，大部分の家族は実施者がゲートボールをしやすいように気を配り，協力しているといえる。岩崎[4]らの調査では，家族の理解についての実施者自身の評価は「協力的」と「だいたい賛成」でほとんどを占め，深い理解が得られているとの報告がなされている。今回の調査とは違った立場からの評価ではあるが，ほぼ同じような結果といえよう。

2）ゲートボール実施者についての家族の評価

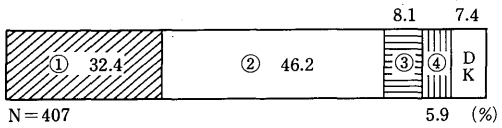
本稿で取り上げた仮説③は，ゲートボール実施者の役割の問題，つまり，仕事や家庭での役割遂行をおろそかにしてゲートボールに熱中しているのではないか，というものであった。そこでまず，仕事とゲートボールについての家族の評価をみてみよう。図2によると，

表11　男女別クロス分析の結果

クロス区分	項目	1 ルールの違いで困った経験	2 ルール統一について	3 団体・組織のあり方	4 大会のあり方	5 練習に対する不満	6 対人関係で嫌になった経験	7 選手の選出で嫌になった経験	8 審判に対する不満	9 クラブ・リーダーへの不満	10 やめたいと思ったこと
年代別	男子	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	女子	−	−	−	−	−	−	−	−	−	** 少ない
地域別	男子	−	−	* 全国組織	* 全国大会	−	−	−	−	−	−
	女子	−	−	−	*** 市町大会	−	−	−	−	−	* 少ない
経験年数別	男子	* ある	* 統一ルール	** 全国組織	** 全国大会	−	−	−	−	−	−
	女子	* ある	−	−	* 市町大会	−	−	−	−	−	−
監督経験別	男子	* ある	*** 統一ルール	*** 全国組織	*** 全国大会	−	* ある	*** ある	*** ある	−	** 少ない
	女子	−	** 統一ルール	** 全国組織	*** 全国大会	−	−	** ある	* ある	−	−
審判資格別	男子	−	*** 統一ルール	** 全国組織	** 全国大会	−	−	−	−	−	−
	女子	−	* 統一ルール	*** 全国組織	** 全国大会	−	* ある	* ある	*** ある	−	−

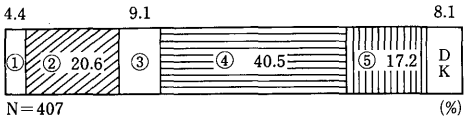
注1）χ^2検定… *** $p<0.001$　** $p<0.01$　* $p<0.05$

注2）表中の結果は，高年代者，農村部，経験年数の長い者，監督経験者，審判有資格者のそれぞれの傾向を示す。



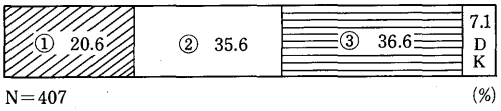
① 家族全員で協力し、気を使っている
② できるだけ実施者に負担をかけないようにしている
③ 何かの問題があった時にのみ、協力したり援助している
④ 家族による協力や援助はほとんどしない

図1　ゲートボール実施者に対する家族の協力・援助



① 仕事を忘れ、ゲートボールに熱中している
② 仕事がときどきおろそかになるが、あまり気にせずゲートボールを優先させている
③ 仕事がときどきおろそかになるので、そのことを気にしている
④ 仕事をきちんと片づけて、ゲートボールを実施している
⑤ 特別にやってもらう仕事はない

図2　仕事とゲートボールについての家族の評価



① ゲートボール中心に毎日の生活が営まれている
② ゲートボールも他の活動(趣味、TVなど)も重視している
③ ゲートボールは本人の生活の一部分(趣味)にすぎない

図3　ゲートボール実施者の生活についての家族の評価

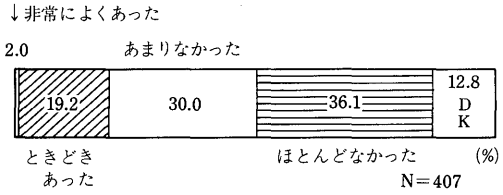


図4　迷惑に思ったり困ったりした経験

表12　ゲートボール実施上の問題(家族による評価)　(　)%

内　　容	男　子	女　子
1．留守がち・用件があるとき連絡がとれない	10 (23.8)	3 (13.6)
2．家の中の用事をしなくなった	8 (19.0)	2 (9.1)
3．熱中しすぎ・忙しいときもいない	8 (19.0)	5 (22.7)
4．自分の仕事・用件を済ませずに出かける	5 (11.9)	1 (4.5)
5．留守番をしなくてはならない	4 (9.5)	3 (13.6)
6．朝早く起こされる・寝不足になる	4 (9.5)	1 (4.5)
7．お金がかかる	3 (7.1)	—
8．無理して出かけるのでからだが心配	2 (4.8)	4 (18.2)
9．家族とときどき口論する	2 (4.8)	—
10．酒を飲むことが多くなった	2 (4.8)	—
11．家の中で練習する	1 (2.4)	—
12．試合の日は弁当をつくらなければならない	1 (2.4)	—
13．朝早く近所に迷惑かけている	1 (2.4)	—
14．洗濯物が増えた	1 (2.4)	—
15．他人の悪口をいう	—	2 (9.1)
16．帰宅が遅い	—	2 (9.1)
17．負けたとき愚痴をこぼす	—	1 (4.5)
18．送り迎えが大変	—	1 (4.5)

自由記述　男子N＝42，女子N＝22

最も多いのは「仕事をきちんと片づけてゲートボールを実施している」という評価であり，40.5%を占めている。問題となるのは「仕事を忘れ，ゲートボールに熱中している」という評価であるが，これは4.4%と極めてわずかである。しかし，「仕事がときどきおろそかになる」を併せると34.1%となる。ここでは，仕事の内容と「ときどきおろそかになる」というのをどのように判断するかが問題となるが，仕事への影響がときどきでていると評価される者が3割を越えているのは，かなり多いとしてよいだろう。

次に図3は，ゲートボール実施者の生活についての評価をみたものである。要するに，ゲートボール中心の生活と評価される者は2割である。また図4は，家族の誰かがゲートボールを始めたことによって迷惑に思ったり困ったりした経験について示したものであるが，「非常によくあった」と「ときどきあった」を併せると21.2%となり，これはゲートボール中心の生活と評価された者の割合にほぼ匹敵する。以上，ゲートボール実施による仕事への影響，実施者の生活，家族への迷惑等についての調査結果をみると，確かに実施者が役割を遂行する上で問題がみられ，仮説③は検証されたといえよう。

3）ゲートボール実施上の問題

最後に，家族が指摘するゲートボール実施上の問題についてみてみることにする。表12によると，「留守がち・用件があるとき連絡がとれない」，「家の中の用事をしなくなった」，「熱中しすぎ・忙しいときもいない」，「自分の仕事・用件を済ませずに出かける」，「留守番をしなくてはならない」などが主に指摘されており，先にみた実施者の家庭での役割の問題に関係した内容が目立っている。その他，具体的にさまざまな問題点が指摘されているが，これらはゲートボール実施者のいる家庭の事情や環境の違いを反映していると考えられる。

要　　約

ゲートボールの実施者および実施者のいる家族を調査することによって，ゲートボールをめぐる問題についてアプローチしてきたた。以下は，研究結果の要約である。

1．ルールの違いにより困ったという経験をもつ者は，3割強とかなりみられ，性別では男子，経験年数別では年数の長い者，地位・役割別では監督経験者，審判有資格者に多い。したがって，仮説①「ゲートボールの統括団体の乱立やルールの違いによる混乱がある」はある程度検証された。

2．ルールや団体・組織のあり方については，全国統一ルールや全国組織としてまとまった方がよいとする意見が多い。この傾向は，男子，経験年数の長い者，監督経験者，審判有資格者に強い。

3．大会のあり方については，全国大会を望む者が多いとはいえ全体的には多様な意見がみられた。したがって，仮説②「ゲートボールの実施方法が勝敗を重視するようになり競技志向化してきた」は，一部にはその傾向が認められるものの今回のデータからは検証されたとはいい難い。なお，全国大会を望む者は，男子は農村部，経験年数の長い者，監督経験者，審判有資格者，女子は監督経験者，審判有資格者に多くみられた。

4．練習に対する不満，対人関係や選手の選出で嫌になったことの経験，審判やクラブ，リーダーに対する不満に関しては，ほとんどないという者が多い。しかし，それほど深刻というほど現実化しているとはいえないが，嫌になった経験や不満を感じたことのある者が2割から最高4割近くみられ，クロス分析では男女経験年数の長い者と女子の審判有資格者に多かった。また，ゲートボールをやめたいと思ったことのある者は，非常に少なかった。なお，嫌になった経験や不満の内容，やめたいと思ったことの理由が具体的に明らかになったが，なかでも対人関係に関することが大きなウエイトを占めていることがわかった。

5．ゲートボール継続のための条件としては，健康であることと仲間との調和・親睦をはかることの2つが圧倒的に多かった。

6．ゲートボール実施者のいる家族の調査から，第1に大部分の家庭は実施者がゲートボールをしやすいように気を配り，協力していること，第2にゲートボールを実施するにあたり仕事がときどきおろそかになると評価される者が34%に達すること，第3にゲートボール中心の生活を送っていると評価される者が2割を越えていること，第4に家族の誰かがゲートボールを始めることによって迷惑に思ったり困ったりした経験があるという者が2割強いること，などが明らかになった。特に，ゲートボール実施による仕事への影響，実施者の生活，家庭への迷惑などについての調査結果から，仮説③「家庭での役割遂行をめぐって問題がある」は，検証された。

7．家族が指摘するゲートボール実施上の問題としては，実施者の仕事や家庭での役割の問題に関係したものが多くみられた。

最後に，本調査研究において明らかになった傾向が，ゲートボール特有のものかどうかは他のスポーツの場合と比較しなければわからないが，少なくともゲートボールをめぐる問題として従来指摘されてきたことのいくつかが実証的に示されたと思う。また，自由記述式の調査によって多くの具体的で詳細な問題点が浮上してきた。これらの点についても，さらに仮説を構成し，検証を加えていく必要があろう。この点は，今後の課題としたい。

（本研究の要旨は，第34回九州体育学会で発表した。）

文　　献

1）藤田純男，芹沢幹雄：焼津市における老人ゲートボールに関する考察，静岡女子大学研究紀要，**12**: 103−113, 1978.
2）岩崎健一，他：ゲートボール愛好者の実態に関する研究，熊本大学教養部紀要，自然科学編，**14**: 37−49, 1979.
3）岩崎健一，他：前掲，p.47.
4）岩崎健一，他：前掲，p.47.
5）金崎良三，徳永幹雄：高齢者のスポーツに関する社会心理学的研究—ゲートボールの実態と効果について—，レクリエーション研究，**9**: 1−14, 1982.
6）金崎良三，徳永幹雄：高齢者のスポーツに関する社会心理学的研究（2）—ゲートボール実施の規定要因について—，レクリエーション研究，**11**: 27−38, 1984.
7）金崎良三：高齢化社会とスポーツ，『健康とスポーツの構図』所収，ぎょうせい，1984, pp.180〜181.
8）徳永幹雄，金崎良三：ゲートボールに関する調査報告書，九州大学健康科学センター，1981. p.86.